









には同世代の会員もいて、刺激を受けるとともに、討論からは研究を先行研究にどのように位置づけるのか、どのように資料を読みといていくのかなど、多くの示唆を得ることができました。また今回は初めて懇親会にも参加いたしました。緊張から自宅の椅子の上で固まっておりましたが、先生方

がつくられるあたたかい雰囲気にも救われました。

なお、今年度からは事務局幹事としても学会にかかわらせていただくことになり、いっそう気を引き締めています。今後感染状況が落ち着き、少しずつお会いできる機会が増えていくことを願っております。

\*\*\*\*\*

寄稿

「発達に目的はない」という思想の両義性

宮澤康人（大人と子供の関係史研究会）

今度の online 大会には、秋山・塩崎両会員よりご支援いただいたのに、私の IT 能力不足のため、ちゃんと参加できず申し訳ありません。しかし、ひとつ強く印象に残った発言があり、それで一文を草しました。

私が参加できたあるセッションの末尾でコメントを求められた会員のおひとりが、「発達に目的はない」という言説が交わされたことに戸惑いを感じたと、ためらいつつ発言されました。「発達に目的はない」と言われてしまうと、自分の今の実践の意味を見失い不安になる、という趣旨と私は聞き取りました。その発言はフォローされないままでした。

先の言説がどのような議論の文脈において交わされたのか知りませんが、私が理解したところでは、これはまさしく発達思想の原理上の対立に根ざした重要問題です。西洋中世後期に「内在観」と呼ばれ、近代の「新教育思想」の源流に見立てられたほど、奥の深い問題に接続するものです。近いところではデューイの現在主義を思い浮かべる人も多いでしょう。デューイは、子供の学習の過程はそれ自体がすでに目的であり、その外部に別の目的があるわけではない。ましてや、あらかじめ設定された目的があるのではなく子供が自分の現在の興味に惹かれて、当面の学習に熱中しているならば、それが将来どう役立つかをわざわざ問う必要もない。それゆえ、当面の学習を充実させることが、将来の学習の可能性の幅を広げるだけでなく、その方向性まで示してくれる、と述べています。いわば現在を生きることの自己目的性という思想で、これは明らかに、伝統思想への挑戦です。

現世の個体の命の時間は限られています。その対極に、永遠という人間の認知能力を超えた絶対的時間概念を想定し、それを基盤にして作られたのが西洋の伝統的形而上学であり、倫理学です。その解体を課題とした点では、ニーチェの生の哲学とも共通します。それは、実存主義が唱える通りでしょう。話を戻すと、デューイの教育思想は、20世紀初頭ではもちろん、今なお教育を支配するヘルバルト学派的教育原理に対抗する思想です。ヘルバルトは、教育には確固とした目的が存在することを大前提にして、その目的を実現するために教育の内容と方法があると考えました。

「発達に目的はない」という言説の思想史的背景が、大会当日議論になったかどうかは知りませんが、ここに二つの問

題点が現れていることは確かです。(1) 一つは、「発達に目的はない」という言説自体に誤解はなかったか、という比較的単純な問題です。(2) もう一つは、その先に現れる本当に厄介な問題です。「目的なしの発達支援、もしくは教育行為は本当に成り立ちうるのか」という問題です。

まず(1)ですが、かつて1990年代に、ソヴィエト社会主義国家の崩壊とともに、「大きな物語」は歴史認識に不要どころか有害である、と声高に唱えられましたが、そこには誤解がありました。そのとき、槍玉に挙げられた大きな物語とは、歴史の全過程を貫く唯一の必然的法則があるという考え方です。具体的には、ソヴィエトマルクス主義が公認する弁証法的唯物史観のことで、少なくとも、「唯一絶対の」と「普遍的必然的法則に貫かれた」という二つの限定を付けて理解しなくてはならない「大きな物語」だったのです。批判されるべきは、歴史の進行と記述に一つの固定した観点しか認めない硬直した歴史観だったのです。ここに見られるように、大きな物語一般、まして歴史叙述に必須の物語性そのものが否定されたというのは誤解です。

この問題になぞらえれば、「発達に目的はない」という言説も、「必然的な法則に基づく唯一絶対の普遍的目的はない」という限定を付けて理解すべきです。そうすれば、これは、教育の目的を狭く硬直させる考え方にはなりません。発達のいわゆる基本原理は、普通こう要約されます。1) 一定の方向・順序がある、2) 一定の段階を経て進む、3) 分化と統合の過程である、4) 個体と環境との相互作用のなかで実現する、5) 個人差がある(『新版教育小事典』(学陽書房))。

個人差が認められているだけではなく、発達の「方向・順序」および「段階」も、「唯一の固定した」と窮屈に限定されていません。即ち発達についてごく正当なことが言われているにすぎません。

ところが、一部の硬直した発達思想は、物理学をモデルとする科学主義的心理学に憧れて、厳密な法則に規定された普遍的発達概念を願望しました。今でも標準的発達にこだわる思想がないとは言えません。それに脅かされて、わが子の発達の方向や順序が科学的にみて正常か異常か不安を抱く親も少なくないようです。

そこから解放されるためにと称して、反科学主義や反発達論さえ唱えられました。その議論には、信じられない主張

もありました。例えば、物理学の厳密性と普遍性を欠く化学は果たして科学かと疑われたばかりか、生物学に至っては、例外的事実が多いだけでなく、宇宙全体の中の限られた範囲にすぎない地球でしか検証できなかつたので、科学とは言えないと決めつけられたことさえありました。

このやり取りの根底には、科学の本質と生命論、そして個体の生死をどう意味づけるかといった人間にとって切実、かつ厄介な問題が潜んでいます。今回はその一端を示唆するに止めざるを得ないでしょう。

「発達に目的はない」という言い方には、未来が途方もない可能性へと開かれているかのような幻想を抱かせる魔力めいた解放感があります。かつての「全面的発達」とか、「発達に終わりはない」の言説とは別の系譜に属するとはいえ、18世紀啓蒙時代のコンドルセに遡る、人間の精神と生活は果てしなく向上する、というロマン主義的進歩信仰の一種です。近代最悪の思想の一つと言えるかもしれません。但し、その幻想性を批判するだけならそれほど難しいことはありません。しかし、その先に、本当の難問の壁が立ち現れることを覚悟しなくてはならないでしょう。

いきなりですが、「遊びをせんとや生まれけむ、戯(たはぶれ)せんとや生れけん。遊ぶ子供の声きけば、我が身さへこそ動(ゆる)がるれ」という、平安時代末期の歌謡(『梁塵秘抄』359)を知る人は多いでしょう。無邪気に遊ぶ子供たちの声を耳にした遊女が目的のない遊びに明け暮れるわが身を悲しんだ、という意味にふつうは解されますが、遊女は子供のように無心に遊びに献身できない自分の不徹底さを嘆いている、と正反対にも解釈されます。どちらに現代の私たちは共感するのか、意見もわかれるところでしょう。

さらに、「シシュフォスの神話」を考えてみます。神に反逆したシシュフォスに課せられたのは、丘の頂上に重い岩を押し上げる刑です。岩は頂上にやっと運び上げた途端に落下するのでくり返し押し上げる作業を永遠に繰り返さなくてはなりません。これを遊びと呼ぶことはできるでしょうか。人間にとって同じ行為を際限なく繰り返すのはただでさえ辛いことです。それが無意味な行為と分かれば、それこそ想像を絶した耐えがたさに違いありません。

これと対照的なのは、労働の目的意識性に人間そのものの成立条件を見出したエンゲルスのような考え方です。昆虫なども人間と同様に建造物を作る。しかし、それらは、ただ本能に隷属して作るにすぎない。人間だけが、目的を意識し、計画に基づいて制作する。この観点からみれば、目的のない遊びなどは、労働より二段階も劣る、虫けら並みの行為ということになります。

教育目的論が切実であるのに、これが本格的に取り上げられることが少ないのは、いったん取り上げると、議論のアリ地獄にはまり込むことが目に見えているからです。それに加えて、教育の作用は、一定の時間を経てのち現れるものですから、どうしても、目の前の行為、文字通りの瞬間作用だけでは成否を決められません。一定の時間の流れとその方向に意味を与える物語、即ち歴史哲学を必要とします。それがたとえいくら小さい物語にしても、です。ところが、実践者が普段、教育目的論に無縁であるかのように、日々の仕事に勤しむことができるのは、何かを育てる行為におのずと備わる喜びがあるからでしょう。

それにしても、目的を忘れてなお、目的に背かず、しかも喜ばしく実践し続けられる人は、自然の摂理によって生命を育てる天職を授けられた者と言うことができます。きっと、生命そのものの自己目的性と一体化しやすい資質に恵まれているに違いありません。そこには、育つものと育てる者同士の共鳴関係も働くことになるでしょう。それは時に、目的を問うことを忘れさせる麻薬効果となることもあります。

ただ、そういうことがあるにしても、今述べている様々な事態のどれにも、生き物が育つ自然作用が働いていないとは考えられません。そうだとしたら、どの局面においても、その基盤には、自然に根拠をもつ教育目的論と、それを支える歴史哲学、あるいは新たな子供の自然を発見する可能性が秘められている、と言えないでしょうか。そのことに気づく sense of wonder を私たちがまだ失っていないことを願うのみです。

**むすびに代えて:**私が学生だった頃、自然科学の中で、生物学は全くつまらない科目でした。若者の知的好奇心を刺激する要素がないどころか、生命の世界への関心を遠ざけるものでした。それとは逆に、現代の生物学は魅力ある謎に満ちています。高校の教科書をパラパラめくるだけでもその雰囲気を感じるほどです。

こういう時代に、教育学者などが、19世紀のスペンサーやハックスリーなどを題材にして、教育思想の自然主義を批判するなどは、時代錯誤というほかありません。

教育目的論の不毛の一因は、教育学における自然哲学の貧困にあります。自然に根拠をもつ教育目的の構築のためには、改めて、自然とは何であるか、とりわけ人間において自然とは何であるか、逆に自然にとって人間とは何かを突き詰めて考えなくてはなりません。要するに、保育者も教育学者も、これからもう一度、初歩から生命自然とは何であるのかを学び直さなくてはならない、ということです

## 新入会員 (2020.7.1~2021.3.31)

上垣内伸子: 十文字学園女子大学  
草野 舞 : 九州大学  
長沼 秀明: 川口短期大学  
西海 聡子: 東京家政大学(短)

馬場 三保: 明星大学(院)  
日隈脩一郎: 東京大学(院)  
吉田めぐみ: 文部科学省

\* 会員異動情報は次号に掲載いたします

寄贈図書 (2020.7~2021.2) 大沢 裕『ペスタロッチーにおける生活陶冶思想の研究:幼児教育の視点から』

一藝社、2020年8月

### 機関誌編集委員会からのお知らせ

『幼児教育史研究』第16号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、2021年5月1日から5月31日までに下記事務局までお送りください。詳細については学会ホームページ掲載の投稿要領をご確認ください。多くの皆さまからのご投稿をお待ちしております。

### 事務局からのお知らせ(↓下記に移転しております↓)

#### 1) 会費納入のお願い

振込用紙を第16回大会年度(2020年10月1日~2021年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方にお送りしております。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。(振り込み用紙が入っていない会員は完納状態にあります。) 年会費: 一般会員 7,000円 特例会員(学生・退職者等) 4,000円

送金先: 郵便振替 00190-9-73668 加入者名: 幼児教育史学会

#### 2) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、どうぞもれなくメールにて下記の学会事務局までお知らせください。

\*\*\*\*\*

幼児教育史学会会報 第31号 2021年3月31日

発行者 幼児教育史学会

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院教育学研究科 浅井幸子研究室気付  
幼児教育史学会事務局 E-mail: admin@youjikyokushi.org 郵便振替 00190-9-73668

編集 塩崎 美穂 印刷 木元省美堂